

第二節 災 害

日本は毎年秋に、二十十日、二十廿日の暴風雨と洪水があり、其の繰返される被害は、積り積つて非常な額に達する。幸い大俣村は人々が死傷したり、家屋が流失して、牛馬の溺死した事は少なかつたが、それでも電信、電話、鉄道、通信が停止して混雑したり、電燈が停電の爲め、不便不安を生じたり、時には山崩れ、道路の欠潰

家屋の倒壊もあつた様で、農作物にも大きな被害を与え、農民一年間の努力を空にする事も度々であつた。

是等の事は当然不作を招き、交通の不便であつた維新前では、其の爲めに饑饉となつて餓死する者もあつた。

尚、此他に地震、旱害、蝗害、火災等の天災地変があり、悪疫の流行も時には見られた。今六国史、類聚国史、

蜂須賀家記等の記載を搜り、前村史の記述や、故老に尋ねた処に従つて、村の災害と思われるものを列記して見る

天武天皇 白鳳十一年 土佐沖大地震 中御門天皇 享保七年六月―八月 屢々大雨、禾を傷け人家

文武天皇 大宝二年九月 阿波国飢え、使を遣して存恤せしむ 享保十三年九月朔日 阿波国大水、稲作被害多

〃 〃 慶雲元年四月 阿波国、苗損ず、賑恤を加う 〃 〃 享保十七年 大蝗(昆虫、ツマクゴロコバイ)

聖武天皇 天平五年三月 甚しき旱に遭い、五穀不登、大 禾を害す。西国、中国、四国大饑饉、之れ、近

〃 〃 税を借貸して百姓の産業を続けしむ 〃 〃 世に於ける三大饑饉の一つと言ふ。日本災異志

天平宝字七年八月 南海道の諸国旱す、阿波讚 所載の草間伊助筆記に依れば「今年、正月より

〃 〃 岐兩國の飢民に賑給せしむ 〃 〃 六、七月迄は風雨時に従い、五穀共豊熟に見え

称徳天皇 天平神護元年七月 阿波国飢え、之を賑給す 無難に有之候処、七、八月に至り、西国、九州

嵯峨天皇 弘仁四年七月 美濃阿波兩國飢病を言上す、百 四国、中国筋、都て稲虫一時に生じ、次第次第

〃 〃 姓賑給 〃 〃 鳴門の潮溜る 〃 〃 五畿内迄も移り此虫後には大に相成り「こが

後村上天皇 正平十六年六月廿四日(北朝康安元年)南海道 一夜の中に数万石の稲を喰い、田畑夥しく損亡

〃 〃 地震、阿波雪湊在家一千七百余悉く海底に沈み 有之、士民飢渴に及び、西国筋より五畿内大坂

正親町天皇 天正十年九月五日 阿波国大洪水 あたり迄道路に倒れ候者数知れず、米価追々高

〃 〃 慶長九年十二月十六日 大地震 値に相成り、大迄も病みつき人民に嘔みつき人

東山天皇 宝永四年十月四日 紀州沖大地震、日本古来最 大の地震と称せらる、徳島城下、地裂人家倒れ

〃 〃 死傷多し、士民を救恤す 〃 〃 天保七年 夏秋大雨打続き、禾穀実らず、大凶

〃 〃 損じも多し。」とある。阿波郡内でも困厄した 作、饑饉、日本全国を通じ、四分二厘作と称せ

〃 〃 である事は察知せられる 〃 〃 らる、藩主賑恤す

桃園天皇 宝曆六年九月 暴風雨禾を傷く。此頃連歳兇荒 天保八年四月 霖雨稼を傷め、穀価騰踊す、庶

〃 〃 上下困弊す、翌九年正月國中に令して奢侈を痛 民食物なく、草根を掘り、木実を以て生命を支

〃 〃 禁、務めて節儉に従う 〃 〃 けに努む(浪華、大塩の乱)

〃 〃 宝曆十年 藩王蜂須賀重喜、水旱に備え諸郡に 天保九年 亦、饑饉、此頃屢々凶作なり

〃 〃 「倉」を造り、年々米粟を貯え廿五万石に至り 天保十三年夏 大旱魃、諸民困窮す

〃 〃 て新しきと易う 〃 〃 天明二年七月八日 大風雨十一日に至りて止む

後松町天皇 明和二年六月 暴雨、稼を傷つく、八月又霖雨 水、城下に溢れ人家漂没す、前代未聞と言ふ(

〃 〃 水潦。阿波国用交えず。金を幕府に請いて允さ 酉の年の大水) 藩、士祿十分の三を取むるを免

〃 〃 れず 〃 〃 じ吉凶の札を簡にし冗費を省く

後桃園天皇 安永元年 夏大水、秋又風雨、阿波国内連歉) 嘉永三年 風雨稼を壊る

〃 〃 連年穀物実らず、食満たず)用度給せず、三年 嘉永六年七月十七日 彗星表われ人心洶々たり

〃 〃 を限り藩士の俸祿半を取む 〃 〃 五月四日より八月初旬まで雨降らず飲料水なし

〃 〃 安永三年夏秋洪水、是より天明、寛政に至る間 〃 〃 嘉永七年十一月四日、十二月十四日 大地震

〃 〃 水旱(洪水、ヒデリ)の災、あらゆる年なし。 〃 〃 安政元年十一月四日―五日 累日、南海大地震

〃 〃 四年を限り藩士の祿、十分の六を減ず。 〃 〃 (震源地は潮岬沖より室戸岬沖)封内人家の倒

〃 〃 光格天皇 天明二年―七年 連年洪水、伊予土佐最も甚し 〃 〃 るもの三千余、十一日、十五日、十二月十二日

〃 〃 (狂歌)「天明は食うや食わずに八九年、これ 〃 〃 十四日、又強震あり、藩王蜂須賀齋昌一万両を

〃 〃 から先はたんとくわんせ」(寛政) 〃 〃 発し、士卒胥吏の災変に遭う者を賑恤し、商人

〃 〃 仁孝天皇 文政六年 夏旱、秋洪水 〃 〃 の暴利を貧るを禁ず

孝明天皇 慶応二年八月五日より三日間 連日豪雨、洪水

(俗に寅年の洪水と云)人畜死傷、家屋の流失する者多し、水患に罹る者に賑恤する事差等あり、日開谷川、上喜来、岩瀧用水穴切れ

明治天皇 明治三年九月 吉野川洪水

明治十六年 旱魃、村民、雨乞のため神社に祈禱す

明治十七年八月廿六日(陰曆七月五日)暴風雨

阿波国流家七十九戸、倒家廿戸

明治十八年六月 降雨打続き吉野川水災、此年

赤痢大流行

明治十九年 旱魃、雨乞いをなす

明治廿二年 暴風雨、赤痢再び大流行す

明治廿五年九月 県下大降雨、諸川洪水、堤防

決潰多く日開谷川又、出水甚し。平地裏、ホウ

ソの瀬、樅の木、相栗、大影等の諸橋梁流失、

赤痢病流行す

明治廿七年 凶作、〇、五なり

明治三十年 凶作、減収三割二分と称す

明治卅一年八月 吉野川大洪水、護岸堤防破損甚し

明治卅二年七月九日 県下大暴風雨、大洪水。

片岡待従被害状況視察

明治卅七年夏 旱魃、此時我軍、旅順を攻閉し

其の陥落と雨の落つると何れが早きと称す

明治四十四年八月十六日 吉野川大洪水、田圃

被害多し(吉野川洪水を「土佐水」と称し恐る)

大正元年九月廿三日 豪雨、暴風、吉野川洪水

堤防決潰、阿波北山より南山迄見透して濁水満

々。

大正四年 西のカラ風吹き続き空穂となり、稲

は全滅的大被害を受く

大正七年八月 米価騰貴(石、五十三円)諸所

に米騒動起る。我村は平静、何等騒擾なし

大正七年十一月 流行性感冒(スペイン風)大

流行し小学校臨時休校す

大正十五年 吉野川改修工事完成(明治四十五

年改修工事着手)

今上天皇 昭和三年八月廿日吉野川大洪水あれども河川改

修の功により堤防決潰を免がれ被害少し

昭和六年 旱魃凶作、雨乞いをなす

昭和九年九月廿一日 凶作、室戸颱風(関西大

風水害)

昭和十四年 大旱害、村に一粒の米なし

昭和廿年八月十五日終戦 九月十七日大暴風雨

十月洪水稲作甘藷大被害、米開相場昂騰す

昭和廿一年十二月廿一日 南海大地震、飢饉

昭和廿六年十月十五日 ルース颱風通過、我村

にも相当の被害あり

天災は其の多くは急激、且つ深刻である。之に対する我等祖先是力を尽して其の対策を建てた。基礎工事を確実に、造林堤防修築に努めて被害を最少限に止めんとし、又一方、穀物の貯蔵によつて飢饉に備へ、凡ゆる面で人力の及ぶ限りを尽した。

災害には此他、火災の難がある。試みに、昭和廿七年「徳島県火災年報」を見ると左の通りである。

火災件数	徳島	阿波郡	大俣村
損害見積(千円)	一三七	六	一
建物焼失坪数	一一四八三九	二二三三	五〇〇
罹災世帯数	三五七一(坪)	九五	一二二
全焼	一五九	六	一
	八一	六	一

半焼者 七八

死者 〇

傷者 三〇

山林火災件数 八

焼失坪数 六六(町歩)

損害見積 一七六一(千円)

日本全体の被害を見ると全災害の内、火災が三割余を占め其被害額は三百七十億円となつてゐる。風水害の如く一度に襲われるのでないから不注意になり勝ちであるが「火の用心」はいつの世でも大切である。

又戦前では一日降雨量が二五〇ミリ程度では洪水とはならなかつたが、最近では一〇〇ミリ(坪当り約一石八斗)で洪水となる事が多い。之は戦時中から戦後にかけて山林を濫伐し、加うるに戦時中から長年月にかけて、河川の改修を行はなかつた結果で、山村的地域の広い本村に於ては特に注意せねばならぬ点である。